分たちの未来の可能性をかけている．彼らにとって，身の回りのすべてのものが，自分と家族が生きていく未来への貴重な資源となる可能性をもっているのである．

「ヒトミも，ハウサのやり方がちょっと分かってきたみたいだね.」樹形についてのひと通りの説明を終えて，フセインはニカッと笑う．私とフセインが話している間に，太陽は足早にサバンナの地平線に沈もうとしていた．真っ赤な夕日を受けて，17 歳の 2 人がそそくさと調査道具を片付けて家路につく．村では今夜も，未来への資源となるであろう「おしゃべり」が私たちを待っているのである．

引 用 文 献

大山修一．2007.「ニジェール共和国における都市の生ゴミを利用した砂漠化防止対策と人間の安全保障―現地調査にもとづく地域貢献への模索」『アフリカ研究』71: 85-99.

高速鉄道建設が中国貴州省の農村に与えた影響について

佐 藤 若 菜 *

筆者は，2009 年 3 月からおよそ 2 年間，中国西南部に位置する貴州省でフィールドワークを行なった．そのうち約 1 年間は貴州省東南部の農村に滞在し，中国の少数民族であるミャオ族の刺繍技術について調査を行なった．

調査村での暮らしにも慣れ始めた 2010 年 5 月初旬，村ではある噂が流れ始めた．「数ヵ月後に高速鉄道の建設が始まる」というのである．その後，高速鉄道に関する話は，村のいたる所で聞かれるようになった．数ヵ月後，村の水田の一部は埋め立てられ，そこには 50 名ほどの農民工[1] が寝泊まりする 2 階建ての大きな宿舎と鉄道部[2] の事務所が建ち，大規模な建設工事が始まった．ここでは，噂が流れ始めた 2010 年 5 月から筆者が

写真 1　鉄道部の事務所と農民工の宿舎

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）農村部に戸籍をもちながら，主に都市部に移動して働く人々の呼称.

2）鉄道事業を管轄する行政部門.

滞在した2011年4月までに，高速鉄道建設をめぐって農村で起こったさまざまな出来事をまとめ，考察する．

噂が流れ始めた当初，村人の話の争点は土地の売却についてだった．高速鉄道建設にあたっては，一部の土地を国が購入，もしくは借用するだろうといわれており，これまで土地を売却したことがなかった村民は果たしていくらで売れるのか，誰の土地が売れるのかといった話を頻繁にしていた．なかには土地を売りたくないという人もいたが，多くの村人が現金獲得の機会を得ることに期待を寄せる口ぶりだった．

実際に大きな動きがみられたのは2010年11月末，高速鉄道建設予定地にある240の無縁墓を掘り起こし，別の場所へ移動する作業が始まってからである．この作業は村人（主に男性）によって行なわれ，ひとつの墓につき200元[3]の報酬が鉄道部から支払われた．報酬は作業に参加した人で均等に分けられた．その後，親族ごとに墓を掘り起こし，移動した．親族が管理する墓には，ひとつの墓につき800元が支払われ，この補償金は親族内で均等に分けられた．墓を掘り起こしてみると，金のイヤリングや翡翠の腕輪がみつかることもあり，喜ぶ村人もいた．

墓を掘り起こし移動することに関して，反対する者はいなかった．しかし，12月初旬，補償金をめぐって不満の声が出始めた．村で唯一コンピューターを所持している男性がインターネットで調べたところ，国が定める

写真2　墓を掘り起こす村人たち

額はひとつの墓につき，無縁墓なら800元，管理する親族がいる場合は3,000元と書いてあったと述べたことがきっかけとなった．加えて，工事にあたっては村を流れる小川の砂を使用していたが，本来であれば1畝（15分の1ヘクタール）あたり3,000元が支払われるといった内容が書いてあったというのである．

この話が村に広まってから数日も経たないうちに，村の男性40名程が集まって，村に建てられた鉄道部の事務所に抗議に出向いた．それを聞きつけた郷長や郷の派出所の所長はすぐに駆けつけ，数日後に説明会を開くことを約束し，その場をひとまず収めた．

会議は3日後の夜に，村のバスケットボール場で行なわれた．各世帯から男性1人を代表として選ぶこととされており，123世帯のうち出稼ぎに出ていない約60名の男性が参加した．筆者は女性であるため参加することができなかったが，会議では村長が鉄道部に代わって説明をしたという．小川の砂の

3）調査当時，1元は約12.6円．

使用にあたっては鉄道部が 1 年に 1 万 5,000 元を支払うこと，それは村の全ての世帯で均等に分配することが説明された．墓については述べられなかったという．

この会議を境に大きく変わったことがある．村人による疑いや妬みの矛先が，鉄道部から村長に向けられるようになったのである．村人が指摘しなければ村長は黙って砂代を着服しようとしていたのではないかと指摘する者が出てきた．加えて，村長は 1 万 5,000 元以上の砂代を得ているのではないかといった憶測も呼んだ．さらに，妬みの矛先は高速鉄道建設に直接関連しない事柄にまで及んでいく．「村長は毎月 1,000 元も給料をもらっているらしい」とか，「村長は政府から（毎年）給付される種芋を親類に横流ししている」といった噂も聞かれるようになった．加えて，「隣村の村長も鉄道部から支払われた砂代の 9 割を着服していたため村人から非難され，その結果，木につるされた」といった噂も流れたことによって，これ以上利益の分配に不平等があれば，暴力も厭わないという声も日に日に高まっていた．

会議から 6 日たっても砂に対する補償金は支払われず，このことに腹を立てた 40 名程の男性が今度はより大きな事務所がある隣村に抗議に出向いた．そこで鉄道部は，3 日後に 1 万 5,000 元を渡すことを約束したという．期日までに村の男たちはその補償金を得たのだが，この砂代を受け取った頃から，これまでまとまっているようにみえた村人の態度が徐々に変化していった．砂代の分配は 2 度の抗議に参加した男性によって決められ，その内容は，会議に出席した 60 名程に各々10 元，鉄道部に抗議に行った者には 1 回につき 1 人 50 元支払うことになった．残額の約 1 万元は，旧正月に行なう運動会の賞金としたり，牛を買って皆で食べることとした．

ここからわかるのは，砂に支払われる補償金はそもそも村人全員で均等に分配すると村長が説明したにも拘らず，実際には抗議に参加した男性によって決められ，その 3 分の 1 を彼ら自身が手に入れる結果となっていることである．彼らの言い分としては，「抗議に参加しなかった男たち（約 20 名）は会議のときにも発言しておらず，村長から賄賂を受けとっているかもしれない」，「抗議に行くのは疲れるから，報酬をもらうべきだ」というのである．一方，抗議に行かなかった男性たちは賛同することも，反論することもなかった．

12 月 20 日頃，土地の買収が始まると，村では「多くの補償金を得たのは誰か」といったことを頻繁に話し，比べるようになった．一番多い世帯は約 10 万元を得たが，全く得られなかった世帯もあった．これにより，土地の所有をめぐって村人同士の言い争いが起こるようになった．怒りの矛先は，鉄道部でも村長でもなく，村人へと移行したのである．

12 月末になると，旧正月のために出稼ぎ先から帰省する 10 代から 40 代の男女が増え始めた．相変わらず村人同士の争いはあったが，徐々に収束しつつあるようにみえた．しかし，ここで言い争いは終わらなかった．特に，数万元以上を得た世帯において，土地の補償金の分配をめぐる争いが始まったので

写真 3　土地売却の合意書にサインをする村人たち

ある．ここでは，父母とその息子にどのように分配するかが争点であった．普段出稼ぎに出ている男性も帰省したことにより，争いはより複雑になっていった．

約 9 万元を得たある世帯は，50 代の父母と 20 代から 30 代の息子が 3 人いた．次男と三男は村外で働いており，普段は長男とその妻，その子ども 2 人が，父母と同居していた．補償金の分配は文字が読める母親が父親に代わって行なうこととし，長男と次男には各々2 万元，三男には 2 万 5,000 元，父母の老後の資金として 1 万 7,000 元，残りの約 8,000 元は売店の開店資金にすると決めた．母親は，普段から面倒見のよい三男が老後の世話をしてくれると当てにしており，三男へは 5,000 元多くあげるだけでなく，現金で渡そうと決めていた．一方，長男と次男には現金ではなく，母親名義の定期預金とし，孫が高校に進学するまで引き落とせないようにすることにした．母親は，「もし私の老後の面倒をみて，死んだときにはちゃんと葬式をあげてくれるなら，お金を渡す」と長男と次男に告げた．それに対して，同居している長男とその嫁が母親に対して怒りをあらわにし，喧嘩が絶えない日々が始まった．その後，母親は三男が住む他県で 1 年の半分以上を過ごしている．

2010 年 5 月からの約 1 年間を高速鉄道建設とともに振り返ると，疑いや妬みの矛先が鉄道部という外部者から徐々に，村長，他の村人，そして家族へと，より身近な人に移行したことがわかる．最初は墓の移動に対する報酬や補償金をめぐって鉄道部に対する不信感が芽生え，その後砂代をめぐっては村長が疑われた．土地売却の際は村民同士が争い，その争いがある程度収まると，次は世帯内でその分配をめぐって言い争いが起きた．

そして，着目すべきもうひとつの点は，この怒りや妬みのなかには，高速鉄道建設が始まる以前から潜在していた問題も組み込まれているということである．たとえば，村長やその妻，親類が利益を多く得ていることや，そうした村長の行動を黙認する村民がいること，世帯内で父母から一部の息子が贔屓されているといったことである．高速鉄道建設をきっかけに新たな利益がうまれ，その獲得をめぐってさまざまなレベルで争いが起きたが，同時に建設以前からあった問題も浮き彫りになったのである．

2011 年 3 月になると，農民工が倍以上に増え，井戸水や木の実をめぐって争いが起きたり，農民工による鶏の盗難事件が起きたり，農民工と村の既婚女性が交際したりと，新たな問題が起こるようになった．

高速鉄道の建設により，中国農村部には現金，そして農民工といった他省出身者が大量

に流入した．また，一部の村民は現金と引き換えに土地を手放したが，今後どのように生計を立てていくのか，定かではない．確かなのは，高速鉄道建設は中国農村部にこれまでとは異なる大きな影響を与えているということである．これによって，中国農村社会はどのように変化していくのか，今後も注目していきたい．

アカの正月をともに過ごして

佐　野　航　平 *

私はラオス北部，中国と国境を接する山間盆地に暮らすアカの人たちの農村に住み込み，現地調査を行なっています．彼らはラオスだけでなく，中国雲南省南部やタイ北部，ミャンマー，ベトナムに広がる山間地に居住しています．彼らの新年は西暦でいうと 12 月です．そんな彼らの正月をのぞいてみましょう．

朝はトントンと音が聞こえます．餅を搗く音です．踏み臼を使って皆で搗くと 2 分もすればもう餅になります (写真 1)．昔はもっとあったという踏み臼も，今では村に 10 基もありません．踏み臼の主要用途である米の籾すりや精米を機械で行なうようになったからです．各世帯で交代して踏み臼を使い，餅を搗きます．

出来た餅はエゴマの粉をまぶし丸く形を整えます．エゴマは餅が手に付くのを防ぐ役割とともに，文化的価値も含んでいるようです．彼らが言うには「餅はタイ系の人たちも搗くが，エゴマを使うのはアカだけであり，エゴマがなくなればアカでなくなる」とのこと．彼らの焼畑にはエゴマが多く植えられていますが，その理由のひとつが年中行事ごとに食べる餅にまぶすために必須であるからです．餅は丸く形を整えた後，干します．干して硬くなった餅は焚火で焦げないように気をつけて焼き，日本と同様に餅が軽く膨らんだところで食べます．エゴマの風味が香ばし

写真 1　踏み臼を用いた餅搗き

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科